

〈展示報告〉

西の丸御蔵城宝館開館記念特別展「名古屋城誕生！」

木村 慎平

1. 展覧会概要

会期：令和3年11月1日(月)～12月19日(日)

会場：西の丸御蔵城宝館展示室

印刷物：開館告知チラシ・ポスター（口絵8）、
特別展公式ガイド（8頁、1部110円
で頒布）、出品目録（会場配布、後掲）

2. 出品作品解説（会場掲出）

本稿に掲載するにあたり、会場に掲出したキャプションの誤りを訂正し、改行等を改め重複箇所を削除した。各作品の員数・年代・所蔵等の基本情報は後掲の出品目録を参照していただきたい。

開催に当たって

慶長14年（1609）、徳川家康は九男義直の居城として名古屋城の築城を決定しました。翌慶長15年にはじまった石垣普請には、西国・北国から20家もの大名が動員され、長大な石垣を短期間のうちに築き上げました。

そして慶長17年には五層五階の巨大な天守が完成し、同20年（元和元年）には城主の居館となる本丸御殿が完成しました。天守や本丸御殿は昭和20年（1945）5月の空襲で惜しくも焼失しましたが、石垣は長い歴史のなかで損壊や修復を経ながらも、いまだにその威容を保っています。

本展では、西の丸御蔵城宝館の開館を記念して、新発見の史料を含む名古屋城築城普請に関する史料をとおして石垣普請の実態をさぐり、重要文化財本丸御殿障壁画「松楓禽鳥図」（表書院）を展示し、本丸御殿の壮麗な障壁画を紹介します。

第一章 清須から名古屋へ

慶長5年の関ヶ原の戦いに勝利したのち、徳

川家康は四男・松平忠吉を清須城に置き、尾張支配の拠点とした。ところが同12年に忠吉が28歳の若さで歿すると、家康九男の義直に尾張一国が与えられた。

そして慶長14年正月25日、家康は義直をともなって尾張に入り、尾張支配の拠点として、熱田台地の西北端に新たな城郭、名古屋城を築くことを決めた。これは清須城が水害に弱いことを懸念したためである。

これにともない、清須城下に住む武士だけでなく、主だった商人や職人、寺社までも、名古屋に移転した。これを後世「清須越し」と称した。こうして、現在につながる城下町名古屋の基礎が造られたのである。

1 徳川家康坐像

慶長14年正月25日、徳川家康は九男義直（1600～50）とともに尾張清須に入り、清須城を廃して名古屋の地に新たな城を築くことを決断した。義直は慶長13年8月に尾張国を与えられたが、いまだ幼少であり、駿府（静岡）の家康のもとで養育されていた。この間、尾張支配の実質的な権限は家康のもとにあり、名古屋築城も家康の意向により、諸大名を動員して行われることとなった。

本坐像の由来や制作年代は不明だが、歿後に東照大権現として崇められた家康を祀る目的で制作されたものと思われる。

2 五条橋擬宝珠

名古屋築城とともに、名古屋城と熱田湊をつなぐ新たな運河・堀川が開削された。本品はその堀川に架かる五条橋（名古屋市中区丸の内1丁目）の欄干に据えられていた擬宝珠である。昭和13年（1938）、現在の橋に架け替えられた際に取り外された。

名古屋築城以前の「慶長七年」の銘が刻まれており、もとは清須城下の五条橋に据えられていた擬宝珠を、清須から名古屋への城下町移転（清須越し）にともなって移設したと考えられる。清須越しを伝える貴重な遺産である。

3 春日井郡清洲古城之図

尾張藩が領内の古城を調査して作成した古城図の一つ。清須は室町時代以来、尾張支配の拠点となっていたが、本図からもうかがえる通り、清須城の周囲は河川や「深沼」に囲まれていて水に弱かった。このため家康は慶長14年、名古屋への城郭と城下町の移転を決断したとされる。

4 蓬左遷府記稿

諸書に拠って名古屋築城の経緯をまとめた書物。徳川家康は慶長14年正月25日、尾張清須に入り、名古屋築城を決定した。同年2月2日には牧助右衛門らを普請奉行に任じ、中井正清を大工棟梁に任じた。

本書によれば、この前年の慶長13年、義直に近侍していた山下氏勝が清須城からの移転を、尾張支配を代行していた平岩親吉に進言し、候補地として名古屋・小牧・古渡の古城を選定したことが、名古屋築城のきっかけとなったという。

5 那古野村之古図

家康による名古屋城築城以前の那古野村周辺の様子を描いたとされる絵図。名古屋城二之丸あたりに、今川氏が築いた古城・那古野城が描かれている。本図は江戸時代後期に名古屋城の故事来歴をまとめた『金城温古録』の編者である尾張藩士・奥村得義が書き写した図である。『金城温古録』によれば、原図は寛永10年(1633)に名古屋(那古野)村の庄屋から出たという。

第二章 石垣普請

慶長15年初旬、家康は加藤清正・福島正則・細川忠興など、西国の20の大名に対して、名古屋城の石垣普請を命じた。家康の命を受けた大名はただちに準備にとりかかった。慶長15年6月3日に石垣の根石置きが行われ、同年9月頃までには本丸や二之丸などの主な石垣が完成した。

関ヶ原の戦い以後、家康は諸大名を動員して多くの城を築いた。大名たちは徳川への忠誠を示すべくその命に従ったが、石材や労働力の確保などにかかる負担は大きかった。また多くの大名が関わる普請現場では、大名同士の調整や連携も不可欠であった。

ここでは、初公開の史料も交えて、名古屋城普請の現場の一端を紹介する。

6 名古屋御城御普請衆御役高ノ覚

名古屋城の石垣普請を担った諸大名の石高と割り当て坪数、担当場所(丁場)を書き上げた覚書。普請現場に派遣された細川家(忠興・豊前小倉)の奉行衆から、国許の家老衆に宛てて出された文書である。

本史料には「賀(加)藤肥後守」(清正)の名前が、天守台石垣の担当として明記され、「大石栗石共ニ御請切」とあり、裏込めの栗石まで含めて単独で普請する旨が記されている。

また、本丸普請に参加する大名と参加しない大名に分かれている点も興味深い。本丸普請に参加しない大名のほとんどは、前年に丹波篠山城普請に動員された大名であり、負担を軽くする狙いがあったと思われる。丁場はこの後さらに変更されるが、大名間の負担が公平になるよう細かな調整が行われたことがわかる。

7 岡村半右衛門尉事

名古屋城普請のため現地で指揮にあたってい

た細川忠利（忠興嫡男）が、国許の家老衆に送った書状。このなかで忠利は、忠興の命で普請奉行に任ぜられた岡村半右衛門尉を手討ちにしたことを釈明し、岡村の無礼な行いを列記している。忠興の家臣を手討ちにしたことは、忠興への反逆と受け取られかねなかったためである。普請現場の緊張感と細川家の内情をうかがわせる興味深い史料である。

本史料には「河津」（岐阜県海津市）・「山口」（愛知県瀬戸市）といった石切場の地名もみえる。また、木下延俊と談合したり、蜂須賀至鎮や毛利高政とともに幕府の普請奉行のもとを訪ねたりするなど、忠利が他の大名との連携に努める姿もみてとれる。普請を無事に成し遂げるには、石積みの技術だけでなく、適切な石切り場を押さえる手腕や、他の大名との人脈も必要であったことがわかる。

8 名古屋御城石垣絵図

名古屋城の石垣普請における各大名の担当場所（丁場）を示した絵図。丁場ごとに担当する大名の家臣（普請奉行）の名が記され、花押が据えられている。

同種の絵図は複数存在するが、本図が慶長15年に作成された原本と考えられる。正確な作成時期は不明だが、細川家の普請奉行として岡村半右衛門尉の名がみられないため、岡村が処刑された5月12日以降（出品番号7参照）と考えられる。

本図の端には普請に参加した大名の役高（負担の基準となる石高）と担当坪数が列記されている。これによると前年に丹波篠山城普請に参加した大名の負担を軽くするため、それ以外の大名の役高が本来の石高の三割増しになっている。

なお、本図の天守台は西北側で御深井丸と直結しており、堀によって隔てられた現在の姿と

異なる。天守台の造りは本図制作以後も設計変更された。

9 名古屋城石垣普請扶持米請取状

加藤清正家臣の松下清蔵と水谷甚右衛門が、名古屋城石垣普請の扶持米（普請の対価としての米）を受け取った際の請取状。もとは「右之御扶持方…」以下が裏面であったが、紙を裏表で剥いで掛幅に仕立ててある。

表面には松下と水谷から、幕府の普請奉行4名に宛てて、名古屋城普請の扶持米として761石余を請け取ったと記されている。一方、裏面には普請奉行から原田右衛門と寺西藤左衛門に宛てて、表面の扶持米を確かに渡すよう記されている。原田と寺西は尾張における年貢徴収などを担っていた人物である。

10 飯米作料請取状

石垣普請が慶長15年にほぼ完了すると、ただちに天守をはじめとする建物の作事（建築工事）が行われた。

本史料は名古屋城本丸北の「御長屋」（多門櫓）の作事を担当した大工（大鋸）の作右衛門が、対価として米（飯米作料）を受け取った際の請取状である。大工一人あたり京枴5升で計算し、延べ785人分、計39石2斗5升を受け取った。

石垣普請の際の扶持米請取状（出品番号9）と様式は似ているが、作事にかかる大工たちは中井正清（大和守）が統括したため、裏面には中井による裏書きが記されている。

11 飯米作料請取状

名古屋城本丸東の柵形門脇の「御長屋」（多門櫓）の作事を担当した左官（壁塗り）の源兵衛が飯米作料を受け取った際の請取状。壁塗り延べ614人分として、一人4升の計算で、計24石5斗6升を受け取ったことがわかる。

出品番号 10 と同じく、裏面には中井正清による裏書きが記されている。

第三章 天守台石垣

名古屋城の象徴ともいべき五層五階の大天守。現在の天守閣は、江戸時代以来の天守が昭和 20 年の空襲で焼失したのち、同 34 年に鉄筋コンクリート造で再建されたものだが、石垣はおおよそ江戸時代の姿をとどめている。

本丸や二之丸の石垣は、各大名が分担して普請にあたったが、天守台石垣は築城の名手として知られる肥後熊本の大名・加藤清正（肥後守）が独力で築き上げた。その痕跡は、天守台の角石に清正の家臣が刻んだ刻印にはっきり残されている。

ここでは、天守台から出土した遺物や、清正による普請の伝承を伝える資料などを紹介する。

12 金城温古録 九

尾張藩士の奥村得義が、藩命により名古屋城の故事来歴をまとめた書物『金城温古録』に掲載された小天守最下層の平面図。

大天守に入るには小天守北側の階段（雁木）を上って口御門から小天守に入り、小天守内を折り返して奥御門を出て、大天守につながる渡り廊下（橋台）を通る必要があった。また、小天守最下層は「御蔵之間」とも呼ばれ、黄金を納める「御金蔵」として利用された。

13 金城温古録 十

『金城温古録』に掲載された大天守最下層の平面図。小天守と同じく大天守最下層も蔵として利用された。金を納める「御金蔵」、朱を納める「御朱蔵」のほか、「御穴蔵」には焰硝（火薬）が納められていた。また、東北隅には井戸が設けられた。この井戸の水は後に「黄金水」

と呼ばれ、暑中でも温くならず寒中でも凍らない、熱病に効く、など様々な効果があるとされた。尾張徳川家十二代当主の斉荘は茶をたてる水として、わざわざこの井戸の水を江戸まで取り寄せたという。

14 金城温古録 十四

『金城温古録』に掲載された天守台石垣角石の刻銘。天守台石垣の四隅のうち東北隅・東南隅・西南隅の石に刻まれた銘を記録している。天守台石垣普請を担った加藤清正家臣の名前を刻んだ銘であり、これらの銘は現在の石垣にも確認できる。西北隅にも刻銘があった可能性があるが、この部分は宝暦 2～5 年（1752～55）に新しい石を用いて全面的に積み直されたため、奥村が調査した江戸時代後期には、すでに刻銘は確認できなかった。

15 石仏

昭和 33 年、天守閣再建工事にともなって、天守台石垣の裏込め石から出土した石仏。何らかの信仰上の意味が込められていた可能性もあるが、おそらく必要な石材を大量に集めるなかで混入したと思われる。

16 石塔

昭和 33 年、天守閣再建工事にともなって、天守台石垣の裏込め石から出土した石塔の部材。石仏（出品番号 15）とおなじく、石材を集めるなかで混入したものであろう。

17 車軸

名古屋城普請の際に石垣に用いる巨石を運んだ車に用いられたという伝承をもつ車軸。尾張藩士の高力種信が著した『尾張名陽図会』には、名古屋城の作事を担った中井正清が残したとされる車軸を転用した火鉢が、挿絵入りで紹介さ

れている。本品は車軸そのままの姿を残しているが、江戸時代以来、築城普請で用いられたとされる車軸が、当時の由緒を物語る遺品として珍重されていたことがわかる。

18 尾張名所図会 前編 卷之一

江戸後期の尾張の名所や、それにまつわる故事を挿絵を交えて紹介した本。加藤清正が名古屋城築城普請の際に、石垣に用いる大石を熱田から名古屋城まで引かせた様子を描いた想像図が掲載されている。

本図のもとになった『続撰清正記』によれば、清正は片鎌の槍を持って大石の上のり、木やり歌を歌ってみずから指揮をとり、その姿を一目見ようと見物人が集まって賑わったという。

なお、本書では清正が天守の建物まで建てたように書かれているが、実際に清正が築いたのは天守台の石垣のみである。

19 名古屋城天守東側立面図

戦前に名古屋市が行った名古屋城の実測調査に基づく図面のうち、天守を東側からみた立面図。天守台石垣は四隅と天端（上端部）のみが描かれている。四隅では直方体の石材の短辺と長辺を交互に積み上げる「算木積み」が見て取れる。

天守台東側は大半が本丸に面しており、北端（本図右端）のみ内堀に面している。本図に描かれた範囲の石垣は後世の積み直しなどが少なく、慶長15年に築造された当初の姿をよく残している。

20 名古屋城天守西側立面図

天守を西側から見た立面図。西側は全体が内堀に面している。西北隅（本図左端）の石垣は宝暦2～5年に修築したさいに、ほぼ全て新たな石で積みなおされており、石の形状や積み方

が慶長期のものとは比べて整っている。

本図中央やや左には、石垣の天端を長方形に切り抜いたような痕跡が描かれており、この切り抜きは現在も目視できる。この切り抜きができた要因は、築城普請の際の搬入出経路の跡、あるいは当初西側に計画していた櫓との接続部分の跡など諸説あるがはっきりしていない。

21 名古屋城天守南側立面図

天守を南側から見た立面図。南側には小天守があり、中央やや西よりに小天守とつながる橋台（渡り廊下）があり、東側（本図右側）は本丸に、西側（本図左側）は内堀に面している。

角石の下部は慶長15年築造当初の姿をよく残しており、東南隅には「加藤肥後守内 小野弥治兵衛」の銘を刻んだ石が、西南隅には「加藤肥後守内 中川太郎平」の銘を刻んだ石が残る。

22 名古屋城天守北側立面図

天守を北側から見た立面図。北側は全体が内堀に面している。東北隅（本図左端）の石垣は慶長15年築造当初の姿をよく残しており、なかには加藤清正家臣が自身の名を刻んだ刻銘のある石も残る（「加藤肥後守内 小代下総」）。この刻銘は天守台北側の御深井丸から目視できる。

西北隅（本図右端）の石垣は宝暦2～5年に修築したさいに、ほぼ全て新たな石で積み直されており、石の形状が慶長期のものとは比べて整っていることが見て取れる。

第四章 初代城主・徳川義直と本丸御殿

新たに築かれた名古屋城の城主となったのは、徳川家康九男の義直である。義直は慶長5年11月に生まれ、同12年に尾張一国を与えられたが、当初は駿府の家康の下で養育され、尾

張の支配は平岩親吉らが代行した。

慶長14年正月、家康は義直とともに尾張に入り、義直の新たな居城として名古屋築城を決定した。同20年4月には、完成まもない名古屋城本丸御殿で、義直と浅野幸長の息女・春姫との婚儀がおこなわれた。

そして元和2年(1616)に家康が歿すると、義直は駿府から名古屋へ移り、本丸御殿に入った(同6年には二之丸御殿へ移る)。以後、義直は家臣の知行を安堵し、職制を整備するなど、明治維新まで続く尾張藩政の基礎を固めた。

23 編年大略

尾張徳川家の歴史を編年にまとめた書物。

慶長20年4月12日、尾張徳川家初代義直の正室として、浅野幸長の息女春姫が名古屋城本丸御殿に輿入れし、婚儀が催されたことが記されている。本書によれば、このとき春姫は女中などを伴って熱田から名古屋城まで行列し、義直の父である家康も、その様子を「西御門御櫓上」(名古屋城二之丸西鉄門の二の門上か)から見物したという。

24 徳川頼宣書状

徳川家康の十男で紀伊徳川家初代当主の徳川頼宣から、兄の義直へ宛てた書状。伏見の「こやば」(小屋場)について義直が便宜を図ってくれたことに対して礼を述べている。

正確な年代は不明だが、寛永元年(1624)に尾張徳川家などが動員されて二条城の普請が行われたさいに、伏見城の建物などが移築されており、「伏見こやば」とは二条城の普請に関わって設けられたものである可能性がある。兄弟の交流をうかがわせる興味深い史料である。

25 徳川義直黒印状

徳川義直が丹羽源之丞に対して、高木村・落

合村・篠田村のうち合わせて250石の知行を安堵する旨を記した黒印状。義直はこの年、家臣たちに対して、それまで家康や秀忠によって与えられていた知行を改めて安堵する黒印状を一斉に発給した。これにより、義直と家臣の主従関係が明確になり、義直による尾張支配の大きな画期となった。後年、尾張藩ではこれを「御黒印始」と称した。

なお、本状の黒印は塗りつぶされているが、これは知行地を返上した際に黒印を塗りつぶしたためである。

26 本丸御殿平面図

昭和実測図のうち、本丸御殿の間取りを示した平面図。東南にある玄関から入り廊下を進むと表書院、対面所と続き、鷺之廊下を隔てて西側には上洛殿が設けられている。このうち築城当初からの建物はおおよそ玄関から対面所までであり、築城当初は北側に奥向きの建物が設けられていた。

寛永11年、三代将軍家光上洛の際に本丸御殿が将軍の宿殿として用いられることになると、奥向きの建物が解体され上洛殿などが増築された。

27 本丸御殿玄関車寄大廊下南側立面図

昭和実測図のうち、本丸御殿玄関車寄から大廊下までの南側外観を描いた立面図。本丸御殿の屋根は建築当初は柿葺であったが、享保13年(1728)に棧瓦葺に変更されたため、本図では棧瓦葺で描かれている。なお、平成30年(2018)に竣工した現在の本丸御殿の屋根は、建築当初の様式にしたがって柿葺となっている。

28 本丸御殿表書院西側立面図

昭和実測図のうち、本丸御殿表書院西側の外

観を描いた立面図。表書院は玄関南廊下から西に向かって大廊下を通った先にあり、江戸時代には「御広間」と呼ばれた。家臣らが藩主など上位の者に拝謁する公式の対面儀礼に用いられる部屋であった。

29 本丸御殿表書院平面図

昭和実測図のうち、本丸御殿表書院の間取りを描いた平面図。対面儀礼の際は、他より一段高くなっている上段之間に主君が南面して座し、拝謁する家臣らは身分・格式に応じて一之間から三之間（本図中では「溜ノ間」）に平伏したと考えられる。なお、「松楓禽鳥図」（出品番号 30）は、表書院一之間・二之間境の襖の

二之間側に描かれた襖絵であり、二之間と三之間南側に平伏する者が面を上げると目に入る位置にあった。

30 本丸御殿障壁画 松楓禽鳥図

本丸御殿の表書院二之間西側（一之間との境）に描かれた襖絵。表書院は、江戸時代には「御広間」と呼ばれ、藩主等に下位の者が拝謁する公式の対面儀礼に用いられる部屋であった。このような儀礼の場で、本図の巨大な松は二之間・三之間に平伏する下位の武士の目に、威圧感をもって飛び込んだ。このように、本丸御殿の障壁画は、儀礼の場で上位者の権力を示す意味も込められていた。

3. 出品目録（会場にて配布）

指定等	名称	頁数	年代・作者など	所蔵
 西の丸御蔵城宝館 NISHINOMARU OKURA MUSEUM 開館記念特別展 「名古屋城誕生！」 出品目録 会期：令和3年11月1日（月）～12月19日（日）				
西の丸御蔵城宝館の開館を記念して、初公開を含む築城普請関係史料をとおして石垣普請の実態をさぐるとともに、重要文化財本丸御殿障壁画「松楓禽鳥図」（表書院）を展示し、本丸御殿の壮麗な障壁画を紹介します。				
第1章 清須から名古屋へ				
1	徳川家康坐像	1軀	江戸時代	
2	五条橋擬宝珠	1基	桃山時代 慶長7年（1602）6月	
3	春日井郡清須古城之図	1枚	江戸時代 17～18世紀	名古屋市蓬左文庫
4	蓬左遷府記稿	1冊	江戸時代 19世紀 加藤品房編	名古屋市蓬左文庫
5	那古野村之古図	1枚	江戸時代 嘉永3年（1850）6月15日写	名古屋市博物館
第2章 石垣普請				
6 初公開	名古屋御城御普請衆御役高ノ覚	1通	江戸時代 [慶長15年（1610）] 4月18日	熊本大学附属図書館
7 初公開	岡村半右衛門尉事	1通	江戸時代 [慶長15年（1610）] 5月14日	熊本大学附属図書館
8 初公開	名古屋御城石垣絵図	1鋪	江戸時代 慶長15年（1610）	靖國神社遊就館
9	名古屋城石垣普請扶持米請取状	1幅	江戸時代 慶長15年（1610）7月7日	
10	飯米作料請取状	1通	江戸時代 慶長16年（1611）10月11日	名古屋市博物館
11	飯米作料請取状	1通	江戸時代 慶長16年（1611）10月25日	名古屋市博物館
第3章 天守台石垣				
12	金城温古録 九	1冊	明治時代写 奥村得義編	
13	金城温古録 十	1冊	明治時代写 奥村得義編	
14	金城温古録 十四	1冊	明治時代写 奥村得義編	
15	石仏	1軀	室町～江戸時代 天守台出土	
16	石塔	1組	室町～江戸時代 天守台出土	
17	車軸	1点	江戸時代	
18	尾張名所図会 前編 卷之一	1冊	明治13年（1880）刊 岡田啓・小田切春江他編	
19	名古屋城天守東側立面図	1枚	昭和 20世紀 昭和実測図54	
20	名古屋城天守西側立面図	1枚	昭和 20世紀 昭和実測図55	
21	名古屋城天守南側立面図	1枚	昭和 20世紀 昭和実測図56	
22	名古屋城天守北側立面図	1枚	昭和 20世紀 昭和実測図57	
第4章 初代城主・徳川義直と本丸御殿				
23	編年大略	1冊	江戸時代 18～19世紀	名古屋市蓬左文庫
24 初公開	徳川頼宣書状	1通	江戸時代 [寛永3年] 4月16日	
25	徳川義直黒印状	1通	江戸時代 元和6年（1620）9月朔日	
26	本丸御殿平面図	1枚	昭和 20世紀 昭和実測図174	
27	本丸御殿玄関車寄大廊下南側立面図	1枚	昭和 20世紀 昭和実測図179	
28	本丸御殿表書院西側立面図	1枚	昭和 20世紀 昭和実測図192	
29	本丸御殿表書院平面図	1枚	昭和 20世紀 昭和実測図190	
30 重要文化財	本丸御殿障壁画 松楓禽鳥図	4面	江戸時代 慶長19年（1614） 表書院二之間西側襖絵	
特記のない限り、所蔵は名古屋城総合事務所です。出品番号は展示順と異なる場合があります。				



5. 会場風景



北側：ウォールケースと襖絵



中央：独立ケースとバナー



西側：独立ケースとマグネットシート



南側：実測図(額装)と独立ケース